

2年2組

 ぼくたち わたしたちの「藍」
 ～いよいよ藍染めに挑戦～


本当に藍色に？生葉染めでハンカチを染めてみよう！

夏休み明け。子どもたちの腰辺りまで大きくなった2年2組の藍。いよいよ藍染めに挑戦のときがきました。今回挑戦したのは、藍の花が咲くまでにしか色が出ないとされる生葉染めです。

前日模様を入れるための「絞り」をしたハンカチを、藍の葉から作った液体に浸します。「先生、全然藍色じゃないけど、大丈夫なの」と心配の声が聞こえる中、「空気に触れたら、青っぽくなってきた」と叫ぶ声。だんだんと色が変化していく様子から「まるで手品みたい」とつぶやく声も。納得いくまで液に浸ける、空気に触れさせるという行為を繰り返す子どもたち。そして、それぞれが模様を出すために留めていた輪ゴムや割りばしを取り外し、水で洗います。すると、「もっときれいな水色になった」「見て見て、面白い模様ができたよ」と驚きの声が教室中に響き渡りました。

ハンカチを掲げて愛おしそうに見る姿、机の上に友だちの作品と並べて模様の違いを楽しむ姿、自分のTシャツに張り付けて「これで藍染Tシャツだ」と満面の笑みで遊ぶ姿。それぞれが自分たちの育てた藍の生まれ変わった姿との出会いを楽しんでいました。

Aさんは、「色々な模様ができてのが楽しかった。もっと色々な模様をつかってみたい」と絞り染めへの新たな追究意欲を語っていました。Bさんは、「もっともっと濃い色にしてみたい。乾燥葉染めにも挑戦したい」と新たな染め方への挑戦意欲に燃えていました。

Cさんはこの日の振り返りに次のように思いを綴っていました。

「今日、藍染めをしました。藍を使ったから、藍の命をもらったってことだから、大事に使いたいです。大事に使えば、藍の葉っぱも『ありがとう』と思ってくれると思います。藍って不思議だなと思います。葉っぱが緑なのに、水や風に当てると、青色になるからです。藍って調べても、調べても不思議なことがたくさんありそう。だから、藍について考えて調べていきたいです。」

藍を道具としてだけでなく、「命」として感じる姿。こうしたことを味わえるのも、自分たちで育てた藍を使った藍染めだからだと感じます。

2回目の藍染め！前回の経験を生かして・・・

9月も中旬、2回目の「藍の生葉染め」。前回の友だちの作品から、お気に入りの模様や、やってみたい模様を探し、やり方を聞き合いながら、こだわりの「絞り」を入れて、前回より4倍ほどの大きなハンカチを染めます。

空気と出合うことで、色が鮮やかになる藍染め。当日は、雨も降っていませんので、外で活動を行いました。「花が咲く直前だし、色が出るのかな」と不安げな子どもたちと担任。手早く藍の葉をミキサーにかけ、出来上がった液を外に持ち出し、自分のハンカチを投入。恐る恐る液から出し空気に触れさせると・・・。前回よりもやや色が薄いものの、鮮やかな空色に近い色に染まっています。「空気に触れると色が変わる」ことを経験している子どもたちは、その後、ハンカチをぶんぶん振り回したり、ハンカチを頭上に掲げ風が当たるようにしたり、手に持って走り回ったり、外で作業する解放感も相まって、思い思いに色が変わっていく様子を楽しんでいました。また、乾



ききっていないハンカチを頭に巻き、身に付けられる嬉しさを感じる姿もありました。この日の空は少し曇っていましたが、子どもたちの手にする藍染めハンカチには、鮮やかな空が浮かび上がっているようでした。

この日の振り返りで、Dさんは、「色が薄くなっていて少し悲しかったけど、開いてみたらすごくいい色だったし、いい模様だったので、大成功だと思いました。でも、乾燥葉染めでは濃くて、本当の藍色に染まってほしい」と綴っており、次の染めへの願いが表れていました。また、Eさんは、「天の川みたいな模様ができてうれしかった。体にくっつけているとほっとする。いつも身に付けていたい」と一生懸命育てた藍を身に付けられる喜びを綴っていました。Fさんは、「藍の命をもらって布を染めると、藍の気持ちが聞こえるような気がした。身に付けると楽しそう。藍が『ありがとう』って言いそうだなって思った。藍の声は優しい声だと思う。だって藍の色は優しい色だから」と藍に気持ちを寄せて染め上がったハンカチを見つめていました。

藍の乾燥葉はどんな色になるのかな？

夏の暑い中、汗水垂らしてみんなで刈った藍の葉。乾燥させ「乾燥葉」にした藍の葉を使って、10月に3回目の藍染めを行いました。「生葉と比べて色にどんな違いがあるのだろう」という疑問をもった子どもたち。この疑問を確かめるべく、ハンカチを染め、その色の出方を見ることにしました。

3回目の藍染めになるので、「絞り」にも子どもたちそれぞれのこだわりが見られます。Gさんは、「星型の模様を入れたい」と、前回同じような模様挑戦した友だちにアドバイスをを受けながら、割りばしを使って絞りを入れていました。Hさんは「絞りを入れないで染めてみたい」と、あえて何も絞りを入れず、藍の色を見ようとしていました。Iさんは、くしゃくしゃに丸めて、ランダムに出る模様を楽しもうと絞りを入れていました。今までの経験を生かし、どんな模様にしようか（またはあえて入れないと）考えながら作業する様は、絞り染め職人のようです。

何回か藍染めを行ってきた子どもたちは、ここでもそれぞれのこだわりが見られます。空気に触れると色が変わることを知っている子どもたちは、風がよく吹く場所を探し、よく風にあたるように頭上にハンカチを掲げたり、「もっと濃くしたい」と、何度も染料につけ空気に触れさせることを繰り返したりと追究していました。生葉染めに近い水色、前回よりもかなり濃い藍色、さらに濃く黒に近い搗（かち）色など、同じ藍染めでも、色の濃さの出方が違って、より子どもたちの個性が出ているようでした。

4回目の藍染めでは、「身に付けられるものを染めたい」という子どもたちの願いがあり、Tシャツを染めました。前日の準備の時に、「宇宙が広がっている感じにしたい」と願いを語ってくれたJさん。今までの経験を活かし、ビー玉や洗濯ばさみ、星型のおもちゃを使い自分の表現したい模様を追究していました。本番では、藍染めの液に浸したTシャツを取り上げ、Jさんは絞りに使った道具を一つ一つ慎重に外していきます。徐々に、道具を使った場所は液に染まらず、白く残っていることが分かってきます。さらに、Tシャツを元通りの大きさに開いてみると、使う道具によってちがった模様がくっきりとついています。Jさんは、「イメージ通りの宇宙や星空みたいになった」と笑顔で語ってくれました。

後日、乾いたTシャツを着てみると、「世界に1つだけのTシャツだ」「これ着て買い物に行きたいな」と教室中で声が挙がりました。あえて模様を入れずに色を付けることに専念した人、今まで友だちがやったやり方を参考にした人、まだ使ったことのない道具を利用した人など、模様も、色の濃さも様々。子どもたちの数だけ、魅力あるTシャツが出来上がりました。

活動の振り返りでは、「今度は家族の分も作ってみたい」、「弟にも着させてあげたい。色々なものを染めて、藍染め名人になりたい」という声があり、「誰かのために染めたい」という願いが生まれつつある子どもたちです。藍の魅力を存分に味わっている子どもたちの追究はまだまだ続いていきます。

